

平成30年度 日本大学危機管理学部個人研究費 研究実績報告書

所属： 危機管理学部 危機管理学科
 資格： 教授
 氏名： 安部川 元伸

	研究課題	国際テロ集団の過激化の手法と我が国への影響に関する研究
報告の概要	<p>研究目的及び研究概要</p> <p>研究目的</p> <p>近年発生しているテロの実行犯について調べると、アルカイダや「イスラム国」などのいわばプロのテロリストが起こした事件よりも、テロリストにリクルートされ、洗脳され過激化した一般人によるテロが目立つようになってきている。わが国では、2020年に東京オリンピック・パラリンピックが開催される予定であり、テロリストは自己の存在力を世界に示し、組織の宣伝のために、過激派のリストに載っていない一般人をリクルートし、彼らにテロを実行させることも考えられる。そこで、我が国でのテロを断固阻止するため、テロリストが我が国を攻撃するとしたらどのような手法を用いるか研究する必要があり、まずは表題のテーマに研究の目的を定めた。</p> <p>2. 研究概要</p> <p>研究は、まず関連情報の収集から始め、東京入国管理局や羽田空港を訪問し、不審者を発見し、水際でテロリストほかの危険人物の入国を阻止する体制とシステムを実地見聞した。テロリストが実際に使用した手口は、外国の報道、書籍、論文などを精読し、テロリストが日本でのビッグイベントを狙うとすれば最も蓋然性が高い手法はどのようなものかなどについて考察した。</p>	<p>過去にオリンピックやその他のスポーツイベントを狙ったテロ事件の背景、実行犯、目的、犯行声明の有無等を調べるうち、テロが起きた背景にはその時々々の政治情勢が深く関係していることが判明した。パレスチナ問題、アフガン戦争、2回にわたるイラク戦争、そしてシリア・イラクの内戦の影響が大きいことが改めて認識された。このことは、学生にテロリズムという社会現象を体系化して教える際にも有用なデータとなっている。</p> <p>もう一つの重要な研究成果は、直近のリオデジャネイロ・オリンピック(2016年)におけるテロリストのテロ計画、現地人をテロ実行者としてリクルートする手口であり、我が国もどういった事態に備えるべきか大いに参考になった。</p> <p>以上が2018年度の主な研究成果である。</p>
研究業績	<p>・論文および著書 著者名・論文標題・雑誌名・査読の有無・巻・発行年・ページ数</p> <p>・学会発表等 発表者名・発表標題・学会名・発表年月日・発表場所</p> <p>・その他 *書評、雑誌投稿など 著者名・標題・掲載誌名・発表年月・発行所 *講演会、研究会等での講演・発表 発表者・発表年月・題目名・講演会等名 *社会貢献活動等</p>	<p>①研究ノート:安部川元伸『国際テロリストによる大量破壊兵器使用の脅威に関する考察-アルカイダと「イスラム国」を中心に-』、『危機管理学研究』、査読あり、第3号、2019.3.20、64～84頁</p> <p>なし</p> <p>①雑誌投稿:・安部川元伸『フィリピン南部の和平合意、仕上げに向かうか』、Strike And Tactical Magazine、2018年5月27日、98～101頁 ・安部川元伸『FIFAサッカー・ワールドカップの熱狂の陰に』、Strike And Tactical Magazine、2018年7月27日、98～101頁 ・安部川元伸『テロリストによる生物兵器攻撃の脅威』、Strike And Tactical Magazine、2018年9月27日、98～101頁 ・安部川元伸『2018年のテロ情勢の総括と自爆志望者の心理』、Strike And Tactical Magazine、2018年11月27日、98～101頁 ・安部川元伸『「イスラム国」(IS)の生き残り作戦とIT企業の対応』、Strike And Tactical Magazine、2019年1月27日、98～101頁 ・安部川元伸『シリアから帰還したジハード花嫁の末路』、Strike And Tactical Magazine、2019年3月27日、98～101頁 ②学会機関誌投稿:『テロリストのリクルート活動と若者の過激化……その対策』、安全保障危機管理学会機関誌『安全保障と危機管理』、Vol. 44、2018.5.10 ③講演会:安部川元伸『国際テロの現状について』、『参議院 国際経済・外交に関する調査会』、2018.4.18、参議院会館 ④社会貢献活動:安部川元伸『国際テロリズムの現状～テロから貴方の命を守るには』、日本大学危機管理学部公開講座、第2回、2018.11.3</p>